

一、次の文章を読み後の問いに答えなさい。

中学三年生の「ぼく」は、幼い頃の出来事をアユメで見ている。小学生のころ、「ぼく」は入院中の母に会いたくて、弟と二人きりでバスに乗って出かけた。母はしばらくしてふつうに振る舞っていたが、とうとう「ぼく」の恐れていた質問をした。

「バス代、どうしたの？」

「イカリてきたんだ、古田の婆さんに・・・」ぼくは母から目をそむけてしまった。まっすぐにみる事ができなかった。「だから返さないといけないんだ」

そういえば母もウナツトクして、それ以上のことは問いつめないだろうとぼくはa踏んでいた。小学三年生の知恵なんてその程度のものであった。お金を盗んだことの、考えうる最高のいいわけだと思っただけ、そうエカンタンにことが運ぶわけはなかった。

「そう。古田の婆さん、なんていったの？」

「・・・なんにも・・・」

「オカしてくださいっていったんでしょ？」

「・・・うん・・・」

「でもだまっていたの？」

「・・・うん・・・」

そのあと母がなにもいわないので、ぼくはb上目づかいにみた。母はやさしく笑ってぼくをみているだけだった。でも、母は泣いていた。ぼくに笑いかけながら、涙がほおをつたっていた。ぼくは母を泣かせてしまったとせつなくなかった。①本当のことをいわなければ。②ぼくは重い口を開いた。

「かしてって、心の中で、いったんだ・・・。口に出していわなかった・・・」
「そう」

母はぼくの手をとった。③細くて、あたたかくて、白くて、きれいな手だった。あのぬくもりはいまでもぼくの手に残っている。

「久志は自分がどういふことをしたか、わかっているわよね」

「・・・うん・・・」

「これからは絶対にそんなことをしちゃだめよ」母はやさしくぼくを諭した。

く川上健一「翼はいつまでも」く

問一 二重線部アくオのカタカナを漢字で答えなさい。

問二 傍線部 a b の意味として適切なものをそれぞれ次から選びなさい。

- | | | | | | |
|---|-------|----------|---|----------|------------|
| a | 踏んでいた | ア 経験した | b | 上目づかいにみた | ア ならんだ |
| | | イ 身を置いた | | | イ 照れていた |
| | | ウ 見当つけた | | | ウ 甘えていた |
| | | エ 損害を与えた | | | エ 機嫌をうかがった |

問三 「ぼく」のうしろめたい気持ちが表示されているひと続きの二文を文中から探し、初めの四字を抜き出しなさい。

問四 太線部①「本当のこと」とは何か。文中より八字で抜き出しなさい。

問五 太線部②「ぼくは重い口を開いた」とありますが、その理由として最も適切なものを次から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 母の顔を見て、素直に謝れば許してくれると感じたから。
イ 本当のことを言わなければ、母にしかられると思ったから。
ウ もうこれ以上うそでごまかしはきかないと観念したから。
エ 自分の行為が母を悲しませたと知り、良心が痛んだから。

問六 太線部③「細くて、あたたかくて、白くて、きれいな手だった」とありますが、この部分の表す内容として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 記憶の中の母が、繊細で傷つきやすい性格だったこと。
イ 記憶の中の母が、すらりとして美しい姿の人だったこと。
ウ 記憶の中の母が、愛情あふれるやさしい人だったこと。
エ 記憶の中の母が、その日、体調がひどく悪かったこと。

二、次の文章を読み後の問いに答えなさい。

便利になればなるほど、人はもつと便利がほしくなる。しかし、ここは正確に考えてみたい。たとえば新幹線というものが現れたとき、人々はA感激した。「なんと便利なものが現れたことか」。当初、東京―大阪間は三時間半だったと思う。しかし、近年のぞみ号は、二時間半で走り、やがては一時間でつながるのかもしれない。
ところで、しかし、新幹線は東京―大阪間を一時間で走るべきだと、いつ誰が望んだことがあっただろうか。新幹線が 東京―大阪間を一時間で走ることは、いったい誰にとって必要なことなのだろうか。

三時間半で走っていたとき、ユーザーは、その所要時間をそのようなものとして、それに満足していたはずなのだ。もつと速く走るべきだとは、決して思わなかったはずなのだ。しかし、技術の側の勝手な進歩で、列車は勝手に速く走り出し、ユーザーは、「さらに便利になった」と単純に喜ぶ。しかし、三時間半なら三時間半で、それに合わせてやってゆけていた生活が、誰も頼みもしないのに一時間になり、それに合わせたより忙しい生活になること、これは「便利になった」というべきことなのだろうか。

つまり、便利とは実は、決して必要からの要請ではなく、所与のものからのB承認であるということだ。与えられて、初めて人は気づくのだ、「これは便利だ」。便利は、必要に、常に一歩先んじている。人は、ほんとうは、必要から便利を求めたことなどなかったのだ。これをつづめて、はつきり言うると、「便利なものは、必要がない」

なければならぬ。全然かまわないもの、それが便利さの定義だ。それが出現するまでは、人はそれなしで十分やってこれていたのである。パソコン然り、携帯電話然り、全自動洗濯機もまた然り。

必要でもないのに出現したものを、人は「便利」と思うわけだが、その便利さが生活と生存に必要不可欠と思うに到る転倒がなぜ起こるのかというと、答えは至極単純である。なんのために生きているのかを考えずに生きているからである。

注 ユーザー・・・利用者 所与・・・与えられること 至極・・・きわめて
池田晶子『死とは何か』

問一 二重線部A Bの漢字の読みを答えなさい。

問二 波線部「技術の側の勝手な進歩」の例として新幹線以外に三つ抜き出しなさい。

問三 傍線部「便利さが生活と生存に必要不可欠と思うに到る転倒がなぜ起こるのか」とありますが、筆者はその理由をどのように考えていますか。「便利」・「必要」という語を必ず用いて八十字程度で説明しなさい。ただし、「便利とは」から始めること。

